

研究発表もうしこみフォーム

氏名： ウニル

氏名のローマ字表記： Unir

所属：

滋賀県立大学

専門分野：

モンゴル近現代史

発表のタイトル：

20 世紀初頭における東部内モンゴルの天然ソーダ資源の市場化

発表要旨（600 字～800 字程度）：

清末から 1920 年代にかけて東部内モンゴルの天然ソーダ資源は大規模に開発され、モンゴル物産の主たる品目として取引されていた。伝統的な畜産物と一部地域の開墾と農耕化によってもたらされた農産物は主なモンゴル物産として知られてきたが、世界的な化学工業の発展に天然ソーダが重要な原料として位置づけられたことにより、モンゴル産天然ソーダ資源も注目を浴びた。本発表は、東部内モンゴルの天然ソーダ資源の市場化プロセスを取り上げることによって、20 世紀初頭におけるモンゴル開発の歴史的意義を考察するものである。

清末に実施された新政を背景に、東部内モンゴルでは大規模な官主導の開墾が行われ、大量の漢人がモンゴル地域に入植した。彼らは、東部内モンゴルの天然ソーダ資源に目をつけ、中国本土式に利用していたが、その一部は満蒙境界地帯に形成されていた鄭家屯、洮南などの貿易都市を経由して取引されていた。これと時期を同じくして、遼河水運や鉄道（四洮線）が開通され、天然ソーダを含む東部内モンゴルの物産が本格的に移出されるようになった。また、第一次世界大戦の勃発による外国産ソーダの輸入が止まったことをきっかけに、モンゴル産天然ソーダに対する需要は急激に高まり、大量に取引されるようになった。しかし、第一次世界大戦の終戦と人工ソーダの開発などにより、1920 年代からモンゴル産天然ソーダの市場化は徐々に収束した。

本発表は、満鉄調査資料など戦前期に書かれた日本語の資料を中心に、20 世紀初頭の短期間で起きた東部内モンゴル天然ソーダ資源の市場化の実態とその歴史的意義を検討するものである。